【花岡信昭の政論探求】李登輝氏来日めぐる「成熟度」

台湾の李登輝前総統が３０日、来日する。念願の「奥の細道」探訪が主目的で、東京などで3回の講演も予定されている。

注目すべきは、中国当局が比較的おとなしいことと、日本の政府・外交当局の静かな対応だ。すでに私人なのだし、大騒ぎすること自体がおかしいのだが、ようやく李登輝氏来日をめぐって成熟した環境が訪れたということか。

日本側の態度としては、観光ビザ免除によって来日阻止の「手立て」がなくなったという事情もあるようだが、首相官邸と外務省が詰めた結果、講演内容にもとくに注文はつけないことにしたらしい。安倍晋三首相の意向が反映されていることは言うまでもないが、そこに安倍政権発足以後の日中関係の微妙な力学変化もうかがえる。

李登輝氏は世界の政治指導者ＯＢの中で、おそらくは日本を最もよく知り、かつての日本人の「恥の文化」「公の意識」といった伝統的精神（いまや見る影もないのが実態だろうが）を最大限に尊重してくれる人である。その李登輝氏からわれわれは、日本には「武士道」という気高い精神があったことを改めて教わったのだ。

2年前、台北郊外の別荘に伺ったことがある。中国が台湾独立阻止を狙って打ち出した反国家分裂法制定の直後だったが、「あんなもの、国内政局が背景にあるんだろ」と、いともあっさり切って捨てたものだ。

帰りがけ、「ちょっと見ていくかい」と、地下の書庫に案内された。まるで図書館のような広い書庫には、木製の重厚な書棚が並び、日本の書籍で埋まっていた。著名な作家や論客などの全集のたぐいは言うに及ばず、岩波文庫は全巻そろっていると言う。

驚いたのは、われわれもまだ読んでいないような近刊本が相当数にのぼったことだ。届けられたばかりと思われる段ボール箱がいくつも積まれていた。

中国当局は李登輝氏を「台湾独立派のボス」と断じているが、李登輝氏はリアリズムを踏まえた理性的な政治家である。ときに踏み込んだ発言をしてみせても、透徹した政治判断が背景にある。

中台関係は日本にとって生命線であり、台湾海峡は重要なシーレーンだ。ここで不測の事態が起きたら、日本は日米中台の入り組んだ関係の中で、戦後最大級の困難な判断を迫られることになる。

李登輝氏を歓迎し、親密な関係を中国側に見せつけるのがいい。それは何につけ居丈高な中国に対する貴重な牽制（けんせい）作用も生むはずだ。李登輝氏来日の「政治利用」というわけではないが、日本外交にとって「たくましさ」を示すためにも格好のチャンスである。

（客員編集委員　花岡信昭）

http://www.sankei.co.jp/seiji/seisaku/070529/ssk070529000.htm